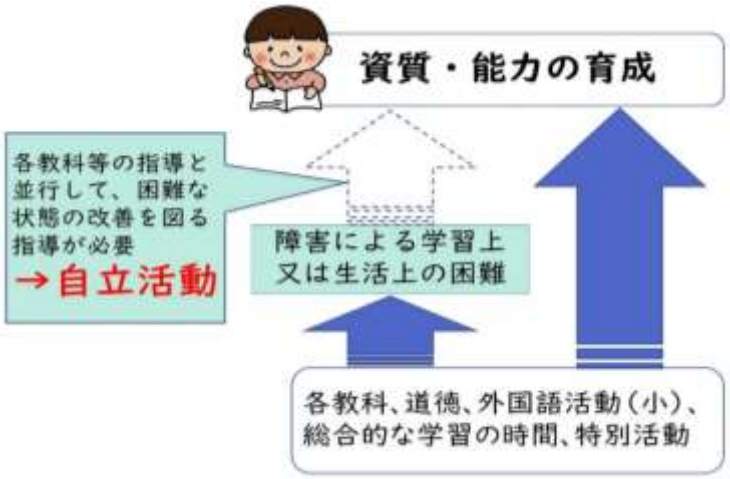
地域支援だより
きらりNet
令和８年１１月４日
第１５４号
秋田県立秋田きらり支援学校
地　域　支　援　部

子どもたちの学びを支える自立活動

６月から、肢体不自由及び病弱の特別支援学級を訪問し、授業参観や先生方との情報交換を行っています。その中で話題の中心になるのが自立活動です。小・中学校に在籍している児童生徒は、小学校及び中学校教育の目標を達成させるために、各教科等を学びます。（知的障害を伴う場合は、特別支援学校学習指導要領で示す各教科等）しかし、肢体不自由や病弱の児童生徒は、障害によって生じる困難さのため、学習面や生活面で十分に力を発揮できないことがあります。そうした状況を改善・克服するための学習が自立活動です。小中学校では、先生方が様々な工夫で授業を展開しています。




Ａ小学校

もうすぐ小学校が統合して、別の校舎に移ります。期待もある反面、今と勝手が違うことへの不安もありました。新校舎の見学を通して見付けた、心配な場所や必要な設備を具体的に挙げ、「練習で対処できる課題」「道具の活用や工夫を考える課題」「支援を依頼して助けてもらう課題」に分けて、自立活動の学習の中で練習や試行錯誤を積み重ね、「心配を安心」に変えていくことに取り組んでいます。


Ｂ小学校

昨年度、「身体の動き」の学習で、麻痺がある方の手を重点的に動かす活動を行ったところ、意欲をもてませんでした。今年度は、「日常生活を過ごしやすい体づくり」を目標に、楽しみながら体全体を使った活動を取り入れています。3色のマットを敷きつめ、ルーレットアプリで出た色に手や足を置く「ツイスターゲーム」では、ルーレットで何色の指示が出るのか分からない面白さがあるので、楽しみながらも必然的に麻痺のある方の手足も使っていました。

Ａ小学校では、本人が安心して学習や生活することに結び付くよう、心配事を具体化し一つ一つ丁寧に解決しています。Ｂ小学校では、本人の困難さにだけ焦点を当てるのではなく、好きなことや楽しめる方法を用いて意欲的に学べるようにしています。ほかにも、各教科を学びやすいように、ほかの友達と違うけれども自分の使いやすい学習用具を使うなど、自立活動の視点で工夫されている実践がたくさんありました。「自分に合う方法」を知ることは自己理解につながります。「自分に合う方法」を子どもと一緒にたくさん見付けてください。

（文責：藤原恵理子）

＜実践紹介＞小学部：準ずる教育課程

自立活動を通して深まった児童の自己理解と教師の児童理解

小学部　蔭山佐智子　先生

■まずは「Ａさんの願い」から（一部抜粋）

４年生のＡさんは右足に不自由さがあります。移動には車椅子を使用していますが、独歩で活動することも出来ます。



・勉強をがんばりたい
・友達とたくさん遊びたい

Ａさん

・学校で困ったことを親ではなく先生たちに相談してほしい



保護者

また、体育やプール、委員会やクラブ活動、手話の学習など、やってみたいことがたくさんあります。

■自立活動の目標と指導内容（４年時）

こうしたＡさんや保護者の願いを出発点として、Ａさんの実態や課題を整理し、指導目標や具体的な指導内容を設定しました。指導内容を設定するに当たっては、Ａさんが主体的に学べるように本人の希望を取り入れながら検討しました。

■実際の学習と振り返り

実際の学習では、長い距離を歩く活動、制作、パソコンのタイピング、手話、様々な人との交流などに取り組みました。学習の中で大切にしてきたことは、「できた・できない」ではなく、活動に取り組んだ後の体や心の状態を記録して自己理解を深めることです。

■Ａさんの自己理解と教師の児童理解

１年間順調に学習できたと思っていましたが、４年生最後の面談で保護者と話し合う中で次のことが見えてきました。

① Ａさんは容姿や疾病に関連した内容の言葉掛けを気にしている。
② 歩きすぎると右足への負担が大きい。

この面談後、自分自身の指導を振り返る中で、自立活動の学習を通して「Ａさんはこれまで感じたことのなかった自分の気持ちや体のことに気付いたんだ」「私（教師）もＡさんの気持ちや体の知らなかった面に気付いたんだ」と理解する機会になりました。

■５年生：「自分のことを自分で伝える」

上記の反省を生かし、５年生の個別の教育支援計画の「合理的配慮を含む支援の内容」には、次の内容を入れました。

・右足に負担がかかりすぎない程度の、生活全般を通した運動量を児童と相談しながら確保する。
・状況に応じて自分の体や心のことを相手に説明できるよう、練習する機会を設ける。（一部抜粋）

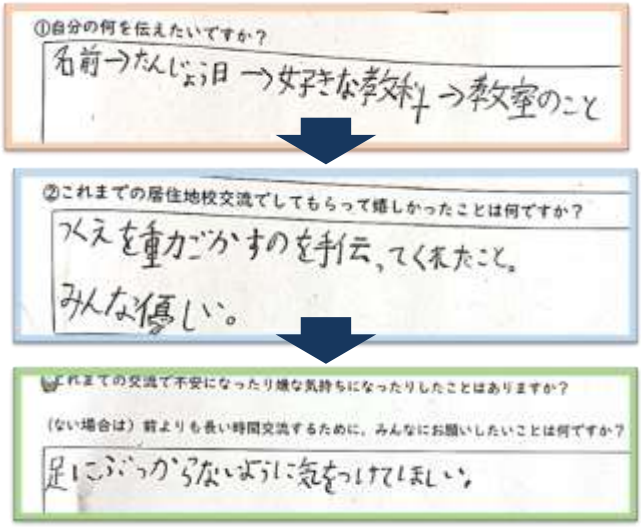
目標や指導内容を設定し、Ａさんの希望も入れつつ年間指導計画を立てました。その中に「セルフケアタイム：私の説明書」を設けました。

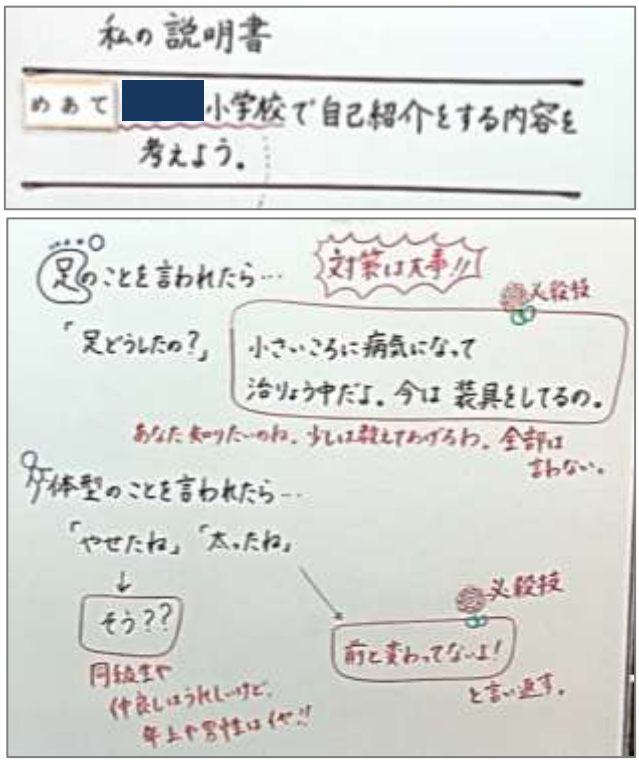
■居住地校交流に向けて

Ａさんは年に数回、居住地校交流を行っています。普段関わりのない友達との交流は楽しみでもありますが、どんなことを話し掛けられるのか予測が付きません。相手に悪気がなくてもＡさんにとっては傷付くことがあ

るかもしれません。そこで、「自己紹介のときに、自分がされて困ることを話しておいて、Aさんが気にしていることを指摘されないように対策しませんか」と提案しました。

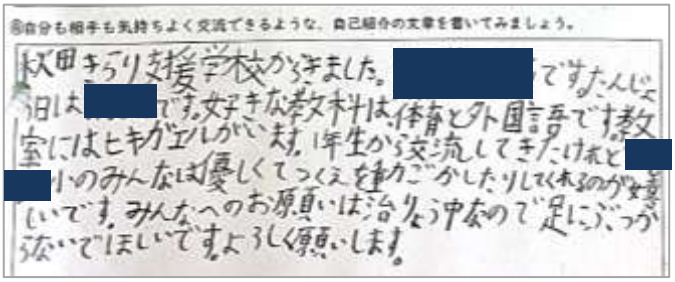
言いたいことを言えずにストレスをためてしまう傾向にあるAさんのために、自分と相手の気持ちを大切にした自己紹介の仕方を、丁寧に順を追って考えました。まず「自分の何を伝えたいか」、次に「これまでの居住地校交流でしてもらって嬉しかったことは何か」、最後に「みんなにお願いしたいことは何か」です。





【自己紹介を考える授業の板書（抜粋）】

こうして丁寧に段階を踏んだことで、Aさんは自分からスラスラと自己紹介の文章を書き、満足した表情を見せてくれました。



【完成した自己紹介文】

■居住地校交流当日

Aさんは、「学校で練習したから大丈夫です」と話し、朝の会で堂々と自己紹介をしました。居住地校の子どもたちも真剣な眼差しで話を聞きました。この自己紹介が安心につながったのか、Aさんは自然に学習の輪に入り、交流を楽しみました。

専門監のつぶやき

子どもの実態や課題は、成長の過程で変化していきます。本事例の指導者である蔭山先生は、そうした変化を「指導のチャンス」と捉え、子どもの実態や課題を見直してアップデートさせました。

自己理解について学ぶ方法として、本事例では交流に向けた自己紹介を取り上げました。その中で、「何を話すか」ではなく「どんな配慮があると生活しやすいのか」「相手にどう伝えるか」等を先生とAさんとの対話を通して一緒に整理していくプロセスが丁寧に組み立てられています。交流に向けた学習と関連付けたことで、自然な形でAさんが学べる工夫がありました。

いろいろな人と関わる中では、「病気なの？」等直接的な言葉を掛けられることもあります。成長とともに学校や職場の人に自分のことを説明する必要があります。その時々の年齢や状況に応じて、「自分で自分のことを相手に伝える」ことは、活動や参加の場を広げることにつながります。

（文責：藤原恵理子）